

* 特に断りがない限り、新改訳2017より使用



希望の光バプテスト教会

2022年 9月 11日 (日)

礼拝メッセージノート

「 終章 ～預言は必ず成就する② 」

| エレミヤ書講解-99 | エレミヤ書52：24～34 | 小野寺 望 牧師

【 エレミヤ書 52章 】

- 24 親衛隊の長は、祭司のかしらセラヤと次席祭司ゼバニヤと三人の入り口を守る者を捕らえ、
- 25 戦士たちの指揮官であった一人の宦官、都にいた王の七人の側近、民衆を徴兵する軍の長の書記、そして都の中にいた民衆六十人を、都から連れ去った。
- 26 親衛隊の長ネブザルアダンは彼らを捕らえ、リブラにいるバビロンの王のもとへ連れて行った。バビロンの王はハマテの地のリブラで、彼らを打ち殺した。こうして、ユダはその国から捕らえ移された。
- 28 ネブカドネツアルが捕らえ移した民の数は次のとおりである。第七年には、三千二十三人のユダヤ人。
- 29 ネブカドネツアルの第十八年には、エルサレムから八百三十二人。
- 30 ネブカドネツアルの二十三年には、親衛隊の長ネブザルアダンを、七百四十五人のユダヤ人を捕らえ移し、その合計は四千六百人であった。
- 31 ユダの王エホヤキンが捕らえ移されて三十七年目の第十二の月の二十五日、バビロンの王エビル・メロダクは、即位した年のうちにユダの王エホヤキンを呼び戻して、獄屋から出し、
- 32 優しいことばをかけ、バビロンで彼とともにいた王たちの位よりも、彼の位を高くした。
- 33 彼は囚人の服を脱ぎ、その一生の間、いつも王の前で食事をした。
- 34 彼の生活費は、死ぬ日までその一生の間、日々の分をいつもバビロンの王から支給されていた。

(4ページへ続く)

◆はじめに ～神に選ばれた預言者の評価、ここに極まる。

1.この章は預言ではなく、歴史的記録によってその成就を表したものである。

2.この章が後にエレミヤ書に付加された理由

- ①エルサレム崩壊以降の預言はすべて成就し、バビロンからの帰還を預言したことばも間もなく成就しようとしていることを示すため。
- ②エレミヤの預言者としての信頼性を証明するため。
- ③捕囚の地にいるイスラエルの残れる者を励ますため。

3.神の啓示を蔑ろにするすべての人が、この事実に向き合うべきである。

- ①捕囚と解放、新しい契約、救い主の初臨などの預言の成就
- ②真の人間性（人類とは何か、何を大事にすべきか、生涯のゴールなど）
- ③これからどこに向かうのか（個人の終末論・世界についての終末論）

◆メッセージのアウトライン紹介とゴール

| エレミヤの生涯に見る勝利

*このメッセージは、エレミヤ書全体を振り返り、神の義の成就を待ち望むものである。



I 指導者たちの運命（24～27節）

(1) バビロン軍が捕らえ移した人々たち

- ①祭司の頭セラヤ（ヨシヤ王時代の祭司長ヒルキヤの孫 36：4、1歴6：13～15）
- ②次席祭司ゼパニヤ
- ③三人の入口を守る者（神殿内の秩序を見張る者）
- ④戦士の指揮官であったひとりの宦官
- ⑤王の七人の側近
- ⑥一般の人々を徴兵する将軍の書記
- ⑦町の中にいた一般の人々60人

*ゼデキヤ王の家族や従者は殺され、本人は視力を奪われ投獄された。

(2) 侍従長ネブザルアダンによって、バビロンの王のもとへ連れて行かれた。

- ①リブラにバビロン軍の本営があった。
- ②彼らは王に撃ち殺された。

II 捕囚民の運命（28～30節）

1.第二列王記25章との比較

(1) この部分は、2列25：1～30には含まれない。

①列王記の記述以外にもバビロン捕囚になった人々がいたことを意味する。

*捕囚は少なくとも3回（前605年、前597年、前586年）行われた。

②この箇所はそれを伝えるために書かれた。

(2) バビロンによる二度の連行の年代の相違について

①列王記第二に記録された2つの連行（24：12～14、25：8～12）

*その治世の第八年に、1万人。

*第十九年には、「都に残された残りの民…残りの群衆」

②エレミヤ書の最初の2つの連行の年代

*（ネブカドネツアルの治世の）第七年（前597）には、3,023人。

*第十八年（前586）には、エルサレムから832人。

*第二十二年（前582）には、745人

③エレミヤ書に書かれた連行は、2つの大規模な連行の前に起こった小規模の連行と理解することができる。

*数字の違いについて、成人で兵士に登録された人数と、それ以外の者を含む人数とする説もある。

III エホヤキンの運命（31～34節）

1.獄舎からの解放

(1) エビル・メロダクがバビロンの王として即位し、その祝いの一環としてエホヤキンを獄舎から解放した（恩赦）。捕囚から37年目。

(2) エビル・メロダク自身は、ネブカドレツアルに代わって、わずかの間（前562～前560）統治しただけで、すぐ従兄弟に暗殺されてしまう。

(3) エホヤキン（コヌヤ）は父に代わり18歳で3か月間。王を務めた悪王。

*二度目の捕囚で家族と共に連行され、以来獄舎に入れられた。

参照 13：18～27、22：24～30

2.バビロンでの恵まれた待遇

(1) エホヤキンは死ぬ日まで一生の間、王の食卓で食事をすることを許された。

(2) 捕らえられていた者が高く上げられる例

*悪王の歩みにさばきが示されたが、神の恵みを味わうことになる。

*22章の預言：母と共に捕えられる。二度とエルサレムを見ない。彼の子孫（7人の息子 1歴3：17-18）は王座から外される。

(3) 恵みによって：エホヤキンは捕囚の地で「祝福の初穂」となった。

*これらはユダの民に祖国帰還の希望を与える出来事。

◆まとめ：エレミヤの生涯に見る勝利

1.地上的評価：エレミヤの生涯はこの世の基準では失敗のように見える。

2.エレミヤは神のことばを忠実に語る、まことの預言者であった。

①エレミヤは召された際、アーモンド（シャケード）の幻を見た。1：11

②エレミヤの隣には、いつもそのことばを見張る（ショケード）神がいた。

*まずエレミヤが神に代わって語り、その通りに神が働かれる。

③アーモンドの開花が春の到来を予告するように、エレミヤは神の計画を予告した。

④預言者として、イエスに似る歩みを全うした：イエス時代の人々の認識 マタ16章

3.エレミヤ書にみる過去の希望と未来の希望：

①エレミヤは新約を預言し、イエスは初臨でそれを成した。

②エレミヤは新約をイスラエルの民族的救いと絡めて預言したが、再臨のキリストが統治する千年王国完成こそ、その成就である。